〔定例講演会要旨〕

成長・発育期の咀嚼機能

鹿児島大学歯学部　歯科矯正学講座
伊藤学而

と　き：1992年9月19日
ところ：本　学

わが国に限らず先進国と呼ばれるところでは，不正咬合と顎機能障害の増加が歯科界における一つの大きな問題になっている。不正咬合は咬合の発達過程で形成されるが，顎機能障害も小学生から始まって徐々に増加し，10代後半から20代前半をピークに発症する。したがってこれらの増加は，咀嚼器官が機能と形態の両面で発達不全を起こしていることを示している。

そこで以下の項目を取り上げて成長・発育期の咀嚼機能について考えを述べるとともに，それが咬合の発達に及ぼす影響やそれに対する臨床的対応についても考えを述べた。

1．咀嚼機能の発達遅滞の現状
　噛めない子，飲み込めない子の存在
　矯正患者と顎関節症患者の食習癖

2．咀嚼機能と顔面頭蓋の発達
　乳房哺乳と咀嚼様運動
　哺乳・咀嚼と顎発育
　咀嚼と顔面骨格の特徴
　咀嚼と唾液腺の発達

3．咀嚼・嚥下の発達診断
　顔貌，顎骨，咬合，咬耗に現れる形態的特徴
　顎運動，嚥下癖に現れる機能的特徴
　食習癖と摂取食品の調査
　顎運動と咀嚼能力の検査

4．臨床的対応
　咀嚼指導
　FKOによる咀嚼訓練
　顎関節症に対するカウンセリング療法
　矯正治療の位置づけ

（東日本学園大学歯学会）